

認知症基本法と新しい認知症観, そして精神科医の役割

高橋幸男 エスポアール出雲クリニック

わたしは 1993 年に、BPSD に苦しむ認知症の人を対象にした集団精神療法的かかわりを行うデイケア（通称：小山のおうち）を始めました。それまでのわたしは古い認知症観（“恍惚の人”的認知症観と呼ぶ）をもっていて、普段の診療では認知症の本人と会話することはほとんどなく、もっぱら家族の訴えを聞くことに重きをおいて、家族が安心できるための投薬中心の診療をしていました。しかし、小山のおうちに通ってくる認知症の高齢者たちの思いを日々聞いていると、認知症の人は“恍惚の人”ではなく、わたしたちが思っているよりはるかに自分や周囲のことを理解していて、認知症が進行することに不安を覚えつらい気持ちをもっていることがわかったのです。それどころか“恍惚の人”的認知症観をもった家族など周囲の人との葛藤が半端ではなく、認知症を病む過程で多くの人が家族のなかにいても寄る辺ない孤独に陥ること、そしてそれらが BPSD の発生と関連していることも知りました。それは大きな気づきでしたが、それまでの診療スタイルが厳しく糾弾され、襟を正さないではおれない強烈な体験でした。

小山のおうちの模様は 1995 年に NHK が全国放送したこともあり、一般の人たちから予想以上の反響がありました。1996 年にはメディカルトリビューン紙に、小山のおうちの経験を「痴呆老人に教えられたこと」として投稿しましたが、当時は医学界でも“恍惚の人”的認知症観が普通であり、認知症の人は理解力があってつらい心の内をもっているなどというわたしの主張に賛同する医師はいませんでした。それでも精神科医のなかには小山のおうちの活動に関心をもち来院する方々がいたこともあり、推薦を受け 2000 年の第 96 回日本精神神経学会では認知症デイケアの実践活動で精神医療奨励賞を受賞しました。その後も、認知症の人の思いを受け止め認知症の人の意思を大切にするかかわりについて、日々の診療はもとより、論文や書籍、それに講演活動など様々な形で実践・啓発活動を行ってきました。1999 年のドネペジルの登場によって、認知症に対する診療がし易くなったことは事実ですが、“恍惚の人”的認知症観はほとんどの日本人の心の奥底にしみこんだままで大きな変化はなかったと思います。

一方で、2003 年に豪州からアルツハイマー型認知症の当事者であるクリスティーヌ・ブライデンさんが来日し、各地で講演したことが契機となってわが国でも認知症の当事者活動に火がつき、次第に活発になっていきます。そして自立した当事者たちの粘り強い活動によって、2023 年 6 月に「共生社会の実現のための認知症基本法」が成立したのです。認知症基本法は、まさに認知症の人の人権宣言であり、主語は認知症の人です。「認知症の人が自らの意思によって日常生活及び社会生活を営むことができる」「尊厳を保持しつつ希望をもって暮らすことができる」共生社会の実現をうたっています。

認知症の人中心の基本法で注目されることとして、認知症の人と家族との関係についても、これまでのように「認知症の人及びその家族の立場に立って」のようにひとくくりにしていないことです。認知症の人と家族の関係は、認知症の人の意思に反して家族によって生活を制約される場合が少なくありません。家族の介護の厳しさやつらさへの支援は重要ですが、認知症の人の意思が尊重された生活が可能になることが、家族の安寧にも通じるという理解の仕方は大切だと思います。

認知症基本法に従って国や自治体は行政的諸施策を行なう責務を負っていますが、精神科医療も果たすべく重要な役割があると思います。これまでの認知症医療は、早期に診断した後の対応には不備がありました。特に認知症の当事者が「空白の時期」と表現した、診断した後の認知機能の低下があまり目立たない時期に、精神科医の対応が十分ではなかった点は重大です。診断した後に抗認知症薬の投薬しかできない診療を、早期診断・早期絶望と当事者たちは表現しました。今はレカネマブなどの治療薬が登場していますが、対象にならない人も多く、空白の時期への対応は依然重要です。認知症になりゆく人や家族の思いをしっかりと聞き、受け止めなければなりません。認知症とつきあいながら、認知症の人の意思が大事にされ、家族ともども前向きに暮らしていけるような診療・ケアが必要だと思います。

これからは古い認知症観を克服していく作業が必要になるでしょう。レカネマブが登場しても国民の“恍惚の人”的認知症観がうすまったという感覚はわたしの臨床にはありません。認知症基本法が示す、認知症になっても大丈夫、認知症の人の意思が大切にされ、認知症になっても希望を持って暮らすことが可能であるという新しい認知症観を広げなければいけません。精神科医がそのような新しい認知症観をもって認知症の人の思いや家族の思いを理解し受けとめられるならば、認知症診療は充実したものになり得ると思うのです。